

ちかみちよりも
まわりみち

vol.6

-Contents-

塾長の活活算数講座 創から

活ママの「教えてください」

大人が読みふける児童文学『ドリトル先生航海記』



豊かな発想力を一生の財産に
松江算数活塾

アメリカ先住民で博物学者のロング・アローは、山から落ちてきた大きな岩のために洞窟に閉じ込められていたのです。ドリトル先生たちの懸命の捜索で無事生還を果たしたアローに、ドリトル先生が歩み寄る場面。互いを尊敬し合っている二人の対面に感動が広がります。

もうひとつは、船が難破した先生一行が、大ガラス海カタツムリの殻に入って帰るところです。家ぐらいある大きなカタツムリで、殻はガラスのように透き通っています。海の中を眺めながらの楽しい帰路の旅。不思議で、おもしろくて、ここも好きな場面です。

のとき読んだよ」と声が弾んでいます。家にあつた児童文学全集で「航海記」を読み、おもしろくなって全巻読んだと言うではありませんか。他にはどんな本を読んでいたか、ひとしきり話はずみしました。

「子どもの頃は本がおもしろかったな」とTさん。私も同感。いい歳になつた今だって児童文学はともおもしろいけれど、子どもの頃はもつと夢中で読めた気がします。

だから、子ども時代と良質な児童文学と出合うことは幸せなことだと思ふのです。子どもと一緒に本を楽しんでくれる大人が一人でも増えますように、と願いながらこの文章を書いています。



(『ドリトル先生航海記』ヒュー・ロフティング作 井伏鱒二訳 岩波少年文庫 小学3・4年以上)

児童文学愛好家 天野和子

まわりみち 松江算数活塾通信 12月下旬号
2023年12月15日発行 vol.6(毎月2回発行)

発行・編集／松江算数活塾
〒690-0871 松江市東興谷町386-7 TEL 0852-67-8005
<https://katsujuku.net>



多くの人に迷惑かけて、里さんの大切な時間が失われ、すごくすくなく痛かったのに、とても幸せだったという、とてもわかりにくいお話を聞いてください。

里さんを迎える前日に、非常勤講師先の慰労会がブッキングされていて、そこで算数の話をいっぱいしてやろうと、詩展の準備はどこか上の空でした。結局、準備は人任せにして、飲み会の方に向かいました。

飲み会では、若い先生から持ち上げられ、飲めもしないのにトップギア。気が付いたら床に伏せていました。

救急車が来ますから、と起こしてくださった店長さんに、キャンセルしてとお願いしたのですが、顔を拭いたおしぼりが真っ赤になったこと

と、救急隊の方に「(救急車を)店の真ん前につけてください」の言葉がとてもかっこよくて、店長さんのおっしゃるとおりになりました。

救急搬送は初めての経験でした。体は固定され、痛みもあって窮屈なはずですが、安心感に包まれて幸せな気分でした。受け入れ病院もすぐ

に決まって、あつという間に到着。救急隊の方も、ドクター、ナースの方々も、その処置するスピードとは対照的な、アンダンテのリズムで、とてもやさしい言葉のシャワーをかけてくださいました。

酔っ払いにですよ。もつたないことです。自業自得なんですから。

それにですよ、そこに寝ている男は、かつて、膝をすりむいて泣いている子に、「あんたが靴紐をちゃん

なのに、酔っ払いであろうが、誰彼の区別なく、慈愛の精神を降り注いでくださいました。ありがたいことです。もつたないことです。

鼻骨骨折でしたので、激痛を感じることもありましたが、悲しい感情とか、悔やまれる感情はありません。ホスピタリティーに包まれたことが思い起こされ、気持ちのよささ

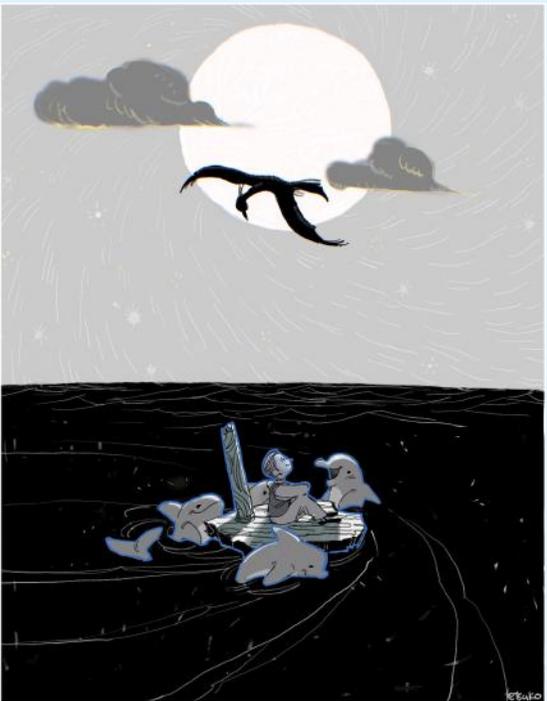
え感じるほどでした。里まちこ詩展には、最終日ぎりぎりで行くことができました。バス停から歩いて向かうと、納屋の二階からかけられた「創から：絆」のタペストリーが目

に飛び込んできました。ぼくのために。そんなことであろうはずもないですが、傷つくことから気づくこの三日間、全てが自分のことのように思えました。ありがたいことです。もつたないことです。

(塾長 川上宜久)

読物「活塾草紙」
大人が読みふける児童文学④

ドリトル先生航海記



ドリトル先生のシリーズは13冊出ていますが、1冊目は『ドリトル先生アフリカゆき』、2冊目がこの『航海記』です。私は『航海記』の方が好きなのでこちらを紹介しします。1冊目から読んでも、『航海記』から読んでも楽しめます。

小学生の私は、ドリトル先生のことを大好きで、心から尊敬していました。先生は動物の言葉が話せるお医者さんで博物学者。度々長い旅に出かけていきます。

ドリトル先生の家には、先生を慕う動物たちが次々にやってきました。中でもオウムのポリネシア、犬のジップ、あひるのダブダブ、猿のチーチーは先生と共に暮らし、先生を家族のように支えています。トミー・スタビンズ君という少年がドリトル先生の助手をつとめることになるのですが、先生のお手伝いができるスタビンズ君がうらやましくてたまりませんでした。特に印象に残っている場面があります。たどり着いたクモザル島で、この物語の重要な登場人物ロング・アローとドリトル先生が対面を果たす場面です。